

多義語の意味構造

——日本語を対象として

国広 哲弥

筆者は最近、国語辞典を開いて最初からめばしい多義語を取り上げ、その多義分岐の構造を明らかにする作業に着手した。今回はそのうちの4語についての中間報告である。

(1) 「あと」(跡、後)

空間的な形である《跡》は時間的には過去の出来事の《後》に生じるものであるので、両義はつながっている。時空相関認知の一例である。《跡》はさらにさまざまな比喻義を派生する。《後》は《時間帯》—《順序》—《移動後の空間》の意味を生じている。この全体にさらに視点の位置（現在時・中立時・移動体）をどこにおくかがからみ、派生義を生じる。

(2) 「うつる」(移、映、写)

この多義は(i)物自体の移動、(ii)像のみがある表面に移動、(iii)移動した像が定着する、の3つに大別される。《定着》の要素は(i)も共有している。

(3) 「おこす」

基本義は《横になっているものを縦にする》であり、眠っている人間の場合は上半身を縦にすることになるが、そうすると一般に生理現象として目を覚すところから《目を覚ませる》が生じ、さらにそこから《活動を開始させる》→《発生させる》が生じたと考える。

(4) 「おちる」

多義の全体を眺めると、落下の原因に基づく分類がふさわしいと考えられた。(i)自然現象、(ii)不注意による、(iii)固着力が不十分、(iv)外力に抗し切れない（比喻的用法のみ）。「不注意による」場合の一用法、「私の名前が名簿から落ちている」は筆者のいう“痕跡的認知”による表現の例である。

多義構造は実際には枝分れ図により示される。

【付記】

第4回では国広哲弥氏による「トートロジーの意味解釈」という発表もおこなわれたが、スペースの関係で割愛する。